

(2) 青葉山遺跡 E 地点第3次調査出土資料からみた縄文時代早期後葉の石器群について

① 石器組成

今回の調査で出土した剥片石器・磨製石器・礫石器117点の石器組成をみると、石鏃19点、石錐2点、石匙8点、石籠14点、不定形石器1類26点、2類11点、3類2点、4類13点、5類1点、6類2点、7類6点、器種不明の破損した剥片石器10点、磨製石斧1点、凹石1点、磨石と敲石に使用されたもの1点である。最も数が多いのは、不定形石器1類と分類した、剥片の縁辺に連続する剝離で刃部を作り出した石器(22.2%)である。次いで石鏃(16.2%)、石籠(11.9%)、不定形石器4類と分類したもの(11.1%)などが多くみられる。

剥片の縁辺に連続する剝離で刃部を作り出した不定形石器1類と、同様に作り出された石籠状の刃部を持つ不定形石器2類を加えると37点になり、剥片石器全体の31.6%をしめる。これらの器種は、製作と廃棄の頻度が高かった石器であると考えられる。

次に、縄文時代早期に属する周辺遺跡出土の石器群と比較してみると(図62)。比較対象としたのは、早期前葉の下ノ内浦遺跡3次調査(渡部紀1988)、早期後葉の上ノ原山遺跡(主浜光朗1995)、早期末葉の富沢遺跡15次調査(斎野裕彦ほか1987)、早期後葉の富沢遺跡28次調査(佐藤甲二・横山裕平1988)、早期後葉の川添東遺跡(主浜光朗ほか1997)、早期後葉の天神山遺跡(小徳晶1982)、早期末葉の北前遺跡1次調査(佐藤洋・斎野裕彦編1982)出土の石器群である。

下ノ内浦遺跡、富沢遺跡、青葉山遺跡E地点第3次調査、北前遺跡は、不定形石器が5割以上で主体をしめ、礫石器が2割以下と少ないという共通点をもつ。定形石器の多い上ノ原山遺跡や礫石器の多い川添東遺跡は、これらと異なるグループであるといえる。特に距離の離れた岩出山町天神山遺跡では石籠と礫石器が非常に多いなど、全く異なる石器組成を示している。

このことは、縄文時代早期における石器組成の地域性を示していると理解される。青葉山遺跡E地点第3次調査は、不定形石器が多く礫石器が少ない富沢遺跡などのグループに属するが、その中でも特に礫石器が少ない遺跡であ

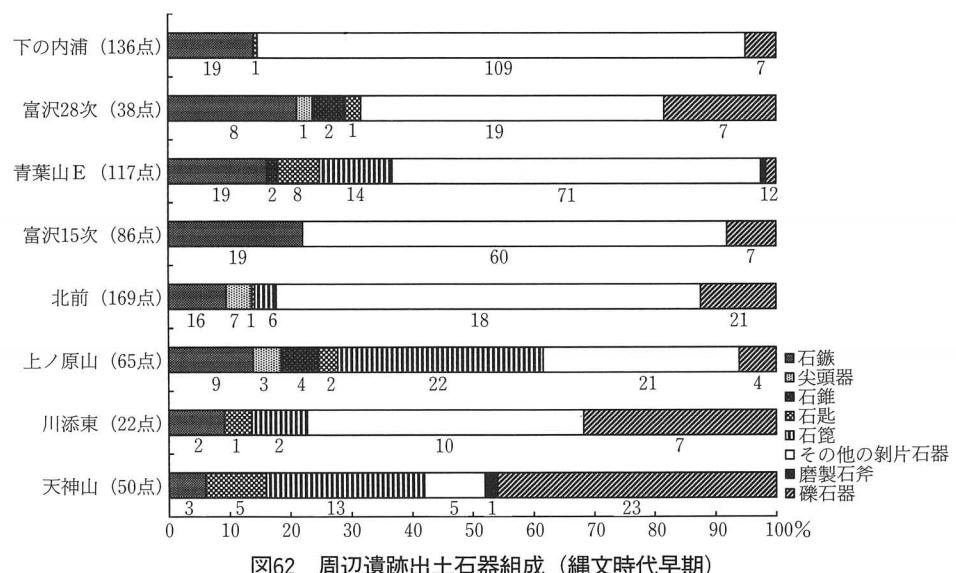


図62 周辺遺跡出土石器組成(縄文時代早期)

Fig.62 Stone tool assemblage of sites belonging to the Initial Jomon period around AOE3

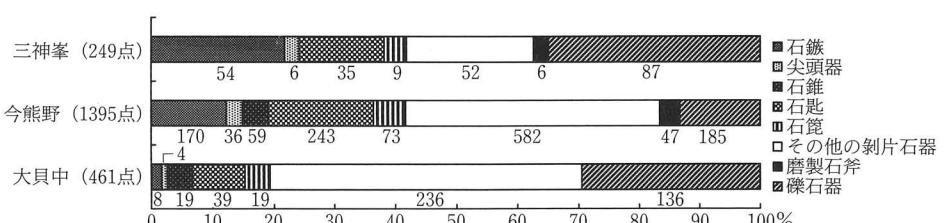


図63 周辺遺跡出土石器組成(縄文時代前期)

Fig.63 Stone tool assemblage of sites belonging to the Early Jomon period around AOE3

る。しかし、他の地域の縄文時代早期石器群、例えば福島県竹之内遺跡(馬目順一編1982)では、石鏃(52.0%)に次いで礫石器(23.3%)が多く出土している。また、関東地方の縄文時代早期後半には、礫石器、特に磨石が多くみられることが指摘されている(小薬一夫1982)。よって広い視野でみると、当期において礫石器が少ないとことは、強い地域性を示していると考えられる。

さらに後続する縄文時代前期前葉の石器群との比較を行った(図63)。対象としたのは、三神峯遺跡(白鳥良一 1974)、大貝中遺跡(主浜光朗ほか1997)、今熊野遺跡(小川出1986)である。

縄文時代早期において地域的に出土量の差がみられた礫石器は、前期前葉になると、どの地域でも安定して含まれる傾向があるといえる。また、定形石器の中では石匙の割合が増加し、早期において主体となることが多かった石籠は減少している。

② 石鏃

青葉山遺跡E地点第3次調査出土の石鏃は、長さ約15~30mm、幅約10~20mmに分布し、長さ:幅の比は1.5:1に近いものが多い。これを、他遺跡出土の石鏃と比較してみる(図64)。対象としたのは、下ノ内浦遺跡、富沢遺跡(15次調査)出土の石鏃である。下ノ内浦遺跡出土の石鏃は、この分布域の右上、つまり大型の範囲に分布し、富沢遺跡出土の石鏃は逆に小型の範囲に分布している。このことから、青葉山遺跡E地点第3次調査の石鏃は、より多様な大きさの石鏃を製作・使用していたといえる。

それらの石鏃は、用いられた石材により大きさが異なることが指摘できる(図65)。頁岩の石鏃は大型、石英安山岩の石鏃は小型で、凝灰岩はその中間である。これを富沢遺跡第15次調査の石鏃と比較してみると(図66)、富沢遺跡の石鏃には、石材による大きさの違いはみられない。

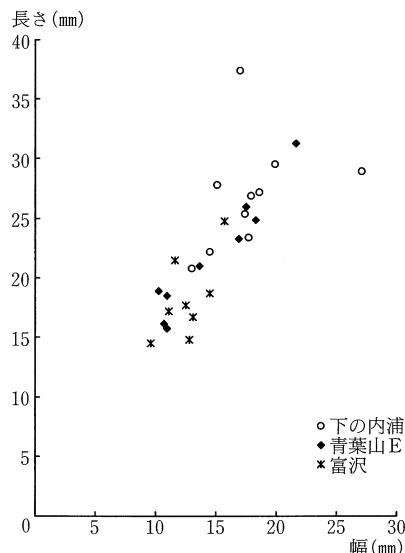


図64 周辺遺跡出土石鏃長幅分布

Fig.64 Scatter diagram of length and width of arrowheads from sites around AOE3

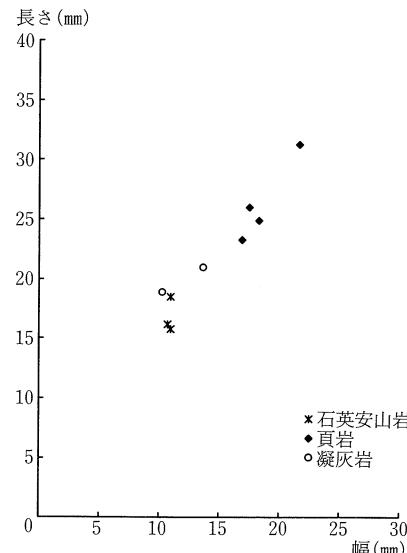


図65 青葉山遺跡E地点第3次調査出土石鏃長幅分布

Fig.65 Scatter diagram of length and width of arrowheads from AOE3

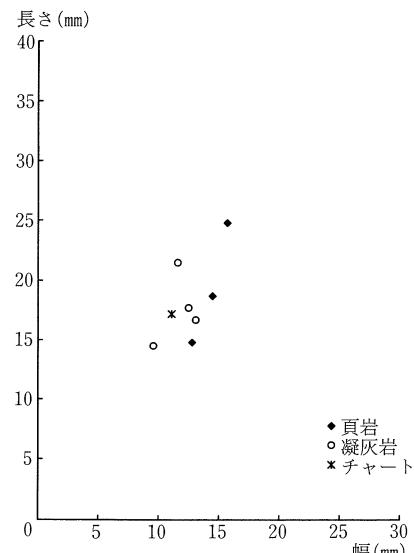


図66 富沢遺跡第15次調査出土石鏃長幅分布

Fig.66 Scatter diagram of length and width of arrowheads from location 15 of Tomizawa site

③ 擦切石斧

遺物包含層から擦切石斧が出土している。この擦切石斧は縄文時代中期後葉に出現し、北海道、東北を中心に分布すると指摘されている(鈴木道之介1981、早川正一1983)。今回は東北地方の擦切石斧をできる限り集成し、その分布や時期、形態、石材などについて考えてみたい。

擦切石斧出土遺跡は東北地方に広く分布するが、青森県、山形県に比較的多くみられる(図67、表11)。秋田県は、出土遺跡数は少ないが、秋田県上ノ山II遺跡(地図No.34)から147点もの報告があったことは注目される。青葉山遺跡E地点第3次調査の所在する宮城県でも6遺跡からの出土が報告されている。福島県あまり出土例がないことから、青葉山遺跡E地点第3次調査の擦切石斧は分布域の南端近くに位置すると考えられる。

擦切石斧の最も古いものは、青森県館平遺跡(地図No.18)、宮城県大穴遺跡(地図No.36)出土のもので早期前半に属している。また前期にも多くの出土例がみられる。先述した秋田県上ノ山II遺跡(地図No.34)は前期後半(大木4~5a式期)を主体としている。その後前期末葉から中期にかけての遺跡からも数点出土しており、宮城県

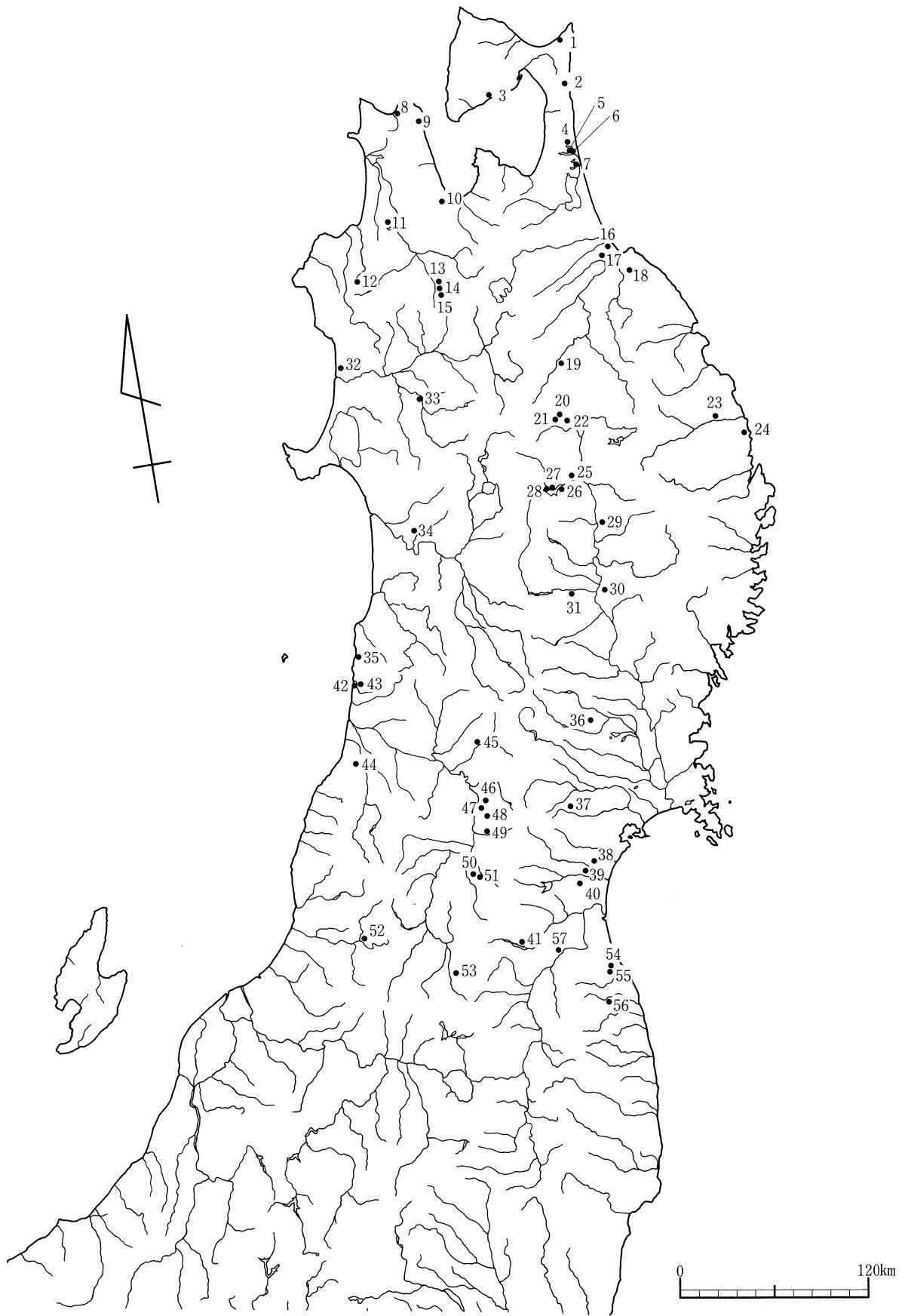


図67 擦切石斧出土遺跡分布図

Fig.67 Distribution of sites where polished stone axes made by abrasion cutting were found

表11 擦切石斧出土遺跡地名表

Tab.11 List of sites where polished stone axes made by abrasion cutting were found

No.	遺跡名	所 在 地	時 期	点数	石 材	文献No.
1	ムシリ	青森県下北郡東通村大字尻屋字ムシリ	不明	1	不明	30
2	下田代納屋	青森県下北郡東通村猿ヶ森下田代	貝殻沈線文	1	不明	8
3	葛沢	青森県下北郡川内町家ノ上	前期	1	不明	30
4	大石平II	青森県上北郡六ヶ所村大字尾鯨字野附	白浜以降	6	緑色凝灰岩(5)、輝緑凝灰岩(1)	38
5	発茶沢	青森県上北郡六ヶ所村大字鷹架字発茶沢2-32	前期前葉?	2	緑色頁岩	29
6	表館(1)	青森県上北郡六ヶ所村鷹架字発茶沢2-44	白浜~赤御堂主体	2	緑色ホルンフェルス(1)、粘板岩(1)	46、47
7	新納屋	青森県上北郡六ヶ所村鷹架道の下	貝殻沈線文	1	不明	28
8	山崎	青森県東津軽郡今別町山崎字山本105、字山崎74-35	円筒下層c~d1、大木10	2	硬砂岩(1)	27
9	尻高(4)	青森県東津軽郡平館村大字今津字尻高	円筒下層bなど前期	1	不明	37
10	熊沢	青森県青森市大字岩渡字熊沢250-488ほか	前期主体	6	不明	10
11	石神	青森県西津軽郡森田村大字床舞字石神	円筒下層d2	1	硬砂岩	4
12	李沢	青森県西津軽郡鶴ケ沢町大字湯舟字若山193-1、字七尾185ほか	貝殻条痕文以降(円筒下層a、d1主体)	4	緑色ホルンフェルス	48
13	大平	青森県南津軽郡大鰐町大字長峰	円筒下層b主体	3	輝緑凝灰岩	16
14	砂沢平	青森県南津軽郡大鰐町大字長峰字砂沢平126	貝殻沈線文~前期初頭	6	頁岩	15
15	永野	青森県南津軽郡碇ヶ閑村大字碇ヶ岡字永野8ほか	前期中心?	13	輝緑凝灰岩・角閃ヒン岩	14
16	長七谷地7号	青森県八戸市大字市川町字長七谷地地内	物見台~赤御堂	2	輝緑凝灰岩	32
17	壳場	青森県八戸市大字河原本字見立山	日計~長七谷地III	4	緑色頁岩(3)、輝緑凝灰岩(1)	17、18
18	館平	青森県八戸市荒井田字館平	白浜(早期中葉)	1	不明	30
19	五庵I	岩手県二戸郡淨法寺町大字駒ヶ嶺五庵2ほか	物見台以降	1	不明	39
20	長者屋敷	岩手県岩手郡松尾村大字松尾大5地割大花森54	円筒下層b以降	2	不明	35
21	野駄	岩手県岩手郡松尾村大字野駄第2地割字前森392	前期~中期	1	凝灰岩	22
22	間館I	岩手県岩手郡西根町荒木田第3地割28ほか	前期未葉~中期中葉	6	輝石安山岩(2)、緑色細粒凝灰岩(2)	51
23	新洞	岩手県岩泉町龍泉洞	不明	1	不明	49
24	小堀内I	岩手県下閉伊郡田老町乙部第14地割字小堀内	早期後葉~前期初頭	1	不明	34
25	大館	岩手県盛岡市大館町	不明	1	不明	12
26	繫III	岩手県盛岡市繫字清水端	中期未葉	1	不明	21
27	元御所I	岩手県岩手郡零石町元御所	前期~中期	4	不明	31
28	下長谷地	岩手県岩手郡零石町大字西安庭第15地割字下長谷地41-1	早期~中期	1	玻璃質流紋岩	31
29	西田	岩手県紫波郡紫波町犬瀬字西田	前期未葉~中期初頭	1	淡緑色細粒凝灰岩	20
30	横町	岩手県北上市立花第1地割内	前期未葉~後期初頭	1	緑色細粒凝灰岩	54
31	本郷	岩手県北上市和賀町煤孫第2地割内159-3	大木7b~8a	1	粘板岩	52
32	根洗場	秋田県能代市坂形字根洗場36ほか	前期	2	緑色凝灰岩	24
33	狐岱	秋田県北秋田郡森吉町大字米内沢字狐岱	前期	1	不明	9
34	上ノ山II	秋田県仙北郡協和町中淀川字千着上ノ山1ほか	大木4~5a	147	緑色凝灰岩主体	45
35	ヲフキ	秋田県由利郡象潟町大砂川字ヲフキ27番地ほか	大木5~6	1	緑色凝灰岩	50
36	大穴	宮城県栗原郡花山村草木沢大穴山	早期前半	1	不明	2
37	上深沢	宮城県黒川郡大衡村駒場字上深沢	大木9	1	凝灰岩	11
38	青葉山E	宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉	早期後葉	1	凝灰岩	
39	三神峯	宮城県仙台市太白区富沢字金山	前期初頭	4	ヒン岩(2)、輝緑岩(1)	6、19
40	今熊野	宮城県名取市高館川上字南台、北台	前期前葉	1	不明	40
41	小梁川	宮城県刈田郡七ヶ宿町小梁川	前期前葉~中期中葉	1	凝灰質頁岩	43
42	宅田	山形県飽海郡八幡町野沢宅田	不明	1	不明	3
43	吹浦	山形県飽海郡遊佐町大字吹浦字堂屋、赤坂、一本木	大木6主体	6	硬玉、綠泥片岩、石英安山岩など	1、36、44
44	岡山	山形県鶴岡市大字岡山	前期~中期	2	不明	3
45	水上	山形県最上郡最上町向町字水上	中期~晚期	3	不明	23
46	土生田	山形県村山市土生田森ノ原地内	早期後葉	1	綠泥片岩	33
47	大原口	山形県村山市本飯田大原口2514-1	不明	1	不明	3
48	村山農高第二農場	山形県村山市本飯田柳堤2485	不明	1	不明	3
49	小林	山形県東根市大字東根字大森	大木1~3	2	不明	7
50	坊屋敷	山形県山形市柏倉字坊屋敷	後期~晚期	2	不明	26
51	熊ノ前	山形県山形市妙見寺熊ノ前	大木8~10	4	不明	13
52	下野	山形県西置賜郡小国町増岡下野	大木9~10	1	不明	25
53	八幡原No.3	山形県米沢市万世町桑山字柿の木	大木10a	1	不明	41
54	段ノ原B	福島県相馬市椎木字段ノ原地内	前期前葉	8	酸性凝灰岩(7)、細粒凝灰岩(1)	53
55	山田B	福島県相馬市大坪字山田地内	前期前葉	3	酸性凝灰岩(2)、泥岩(1)	55
56	羽白D	福島県相馬郡飯館村大倉字羽白	前期初頭、中期前葉	1	蛇紋岩	42
57	中森	宮城県白石市齋川字中森	不明	1	不明	56

<擦切石斧関連文献リスト>

- | | |
|------------------------|---|
| 1 荘内古文化研究会 | 1955『吹浦遺跡』 |
| 2 興野義一 | 1969「宮城県大穴遺跡の早期縄文土器について」『北海道考古学』5 pp. 7-14 |
| 3 山形県史編纂委員会 | 1969『山形県史 資料編11』 |
| 4 江坂輝彌編 | 1970『石神遺跡 円筒土器文化の編年的研究』 |
| 5 山形県教育委員会 | 1972「岡山 山形県における原始住居跡と立石遺構」 |
| 6 白鳥良一 | 1974「仙台市三神峯遺跡の調査」『東北の考古・歴史論集』平重道先生還暦記念会編 pp. 1-43 |
| 7 東根市教育委員会 | 1975『小林遺跡 一縄文前期遺跡と平安時代集落跡』 |
| 8 青森県立郷土館 | 1976『下田代納屋B遺跡発掘調査報告書』 |
| 9 秋田県史編纂委員会 | 1977『秋田県史 考古編』 |
| 10 青森県教育委員会 | 1977『熊谷遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第38集 |
| 11 宮城県教育委員会 | 1978『東北自動車道遺跡発掘調査報告書1』宮城県文化財調査報告書第52集 |
| 12 盛岡市教育委員会 | 1978『盛岡市大館遺跡発掘調査報告書』 |
| 13 山形県教育委員会 | 1979『熊ノ前遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第16集 |
| 14 青森県教育委員会 | 1979『永野遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第56集 |
| 15 青森県教育委員会 | 1979『砂沢平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第53集 |
| 16 青森県教育委員会 | 1979『大平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第52集 |
| 17 青森県教育委員会 | 1979『壳場遺跡発掘調査報告書(第1次調査、第2次調査)』青森県埋蔵文化財調査報告書第93集 |
| 18 青森県教育委員会 | 1979『壳場遺跡発掘調査報告書(第3次調査、第4次調査)・大タルミ遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第93集 |
| 19 仙台市教育委員会 | 1980『三神峯遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第25集 |
| 20 岩手県教育委員会 | 1980『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書VII(西田遺跡)』岩手県文化財調査報告書第51集 |
| 21 岩手県埋蔵文化財センター | 1980『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書 盛岡市 つなぎIII・つなぎIV・上野・南の又・堂ヶ沢I・II遺跡 零石町 広瀬II遺跡』岩手県埋文センター文化財調査報告書第13集 |
| 22 岩手県埋蔵文化財センター | 1980『東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書 松尾村 野駄遺跡・寄木遺跡 西根町 崩石遺跡』岩手県埋文センター文化財調査報告書第11集 |
| 23 山形県教育委員会 | 1980『水上遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第27集 |
| 24 秋田県教育委員会 | 1980『中田面遺跡・重兵衛台I遺跡・重兵衛台II遺跡・根洗場遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第74集 |
| 25 山形県教育委員会 | 1981『下野遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第38集 |
| 26 山形県教育委員会 | 1981『山形市柏倉地区遺跡群発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第33集 |
| 27 青森県教育委員会 | 1981『山崎遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第68集 |
| 28 青森県教育委員会 | 1981『新納屋遺跡(2)発掘調査報告書』 |
| 29 青森県教育委員会 | 1981『発茶沢』青森県埋蔵文化財調査報告書第67集 |
| 30 鈴木道之介 | 1981『図録 石器の基礎知識III』柏書房 |
| 31 岩手県教育委員会 | 1982『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書 零石町 下長谷地・元御所I・II遺跡』岩手県埋文センター文化財調査報告書第28集 |
| 32 青森県教育委員会 | 1982『長七谷地遺跡発掘調査報告書 長七谷地2・7・8号遺跡(昭和55・56年度)』八戸市埋蔵文化財調査報告書第8集 |
| 33 加藤稔編 | 1982『村山市史 別巻1 原始・古代編』 |
| 34 岩手県埋蔵文化財センター | 1983『小堀内I遺跡発掘調査報告書 田老大規模年金保養基地関連遺跡発掘調査』岩手県埋文センター文化財調査報告書第52集 |
| 35 岩手県埋蔵文化財センター | 1984『長者屋敷遺跡発掘調査報告書(III)』岩手県埋文センター文化財調査報告書第77集 |
| 36 山形県教育委員会 | 1984『吹浦遺跡 第1次緊急発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第82集 |
| 37 青森県教育委員会 | 1984『尻高(2)・(3)・(4)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第89集 |
| 38 青森県教育委員会 | 1985『大石平遺跡II』青森県埋蔵文化財調査報告書第97集 |
| 39 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター | 1986『五庵I遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第97集 |
| 40 宮城県教育委員会 | 1986『今熊野遺跡II 縄文・弥生時代編』宮城県文化財調査報告書第114集 |
| 41 米沢市教育委員会 | 1986『米沢市万世町桑山団地造成地内埋蔵文化財調査報告書 第III集 大清水遺跡』米沢市埋蔵文化財調査報告書第17集 |
| 42 福島県教育委員会 | 1987『真野ダム関連遺跡発掘調査報告書X 岩下向A遺跡・羽白D遺跡(第1次)・羽白E遺跡』福島県文化財調査報告書第183集 |
| 43 宮城県教育委員会 | 1988『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書IV 大梁川遺跡・小梁川遺跡(石器編)』宮城県文化財調査報告書第126集 |
| 44 山形県教育委員会 | 1988『吹浦遺跡 第3・4・4次緊急発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第120集 |
| 45 秋田県教育委員会 | 1988『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書II 一上ノ山I遺跡・館野遺跡・上ノ山II遺跡』下秋田県文化財調査報告書第166集 |
| 46 青森県教育委員会 | 1989『表館I遺跡IV・発茶沢I・V遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第126集 |
| 47 青森県教育委員会 | 1989『表館I・V遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第127集 |
| 48 青森県教育委員会 | 1989『恵沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第130集 |
| 49 三陸町史編纂委員会 | 1990『三陸町史』 |
| 50 秋田県教育委員会 | 1990『大砂川地区農免農道西部事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 I -ヲフキ遺跡-』秋田県文化財調査報告書第199集 |
| 51 岩手県文化振興事業団 | 1991『間館I遺跡発掘調査報告書 土地改良総合整備事業寺田西部地区関連遺跡発掘調査』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第156集 |
| 52 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター | 1992『本郷遺跡発掘調査報告書 東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第164集 |
| 53 福島県教育委員会 | 1995『相馬開発関連遺跡調査報告書III』福島県文化財調査報告書第312集 |
| 54 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター | 1996『横町遺跡発掘調査報告書 交通安全施設西部事業立花地区関連遺跡発掘調査』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第236集 |
| 55 福島県教育委員会 | 1997『相馬開発関連遺跡調査報告書V』福島県文化財調査報告書第333集 |

小梁川遺跡（地図No41）の中期後葉主体の住居からも出土がみられる。これらのことから青葉山遺跡E地点第3次調査の擦切石斧は比較的早い時期に属するものと考えられる。

石材をみると（図68）、凝灰岩系の比較的軟質と考えられる石材が最も多く用いられており（58.0%）、青葉山遺跡E地点第3次調査出土の擦切石斧と共に通する。特に先にあげた秋田県上ノ山遺跡でも147点のほとんどが緑色凝灰岩とよばれる石材を用いていると報告されている。そのほか様々な石材が用いられているが、時期または地域による偏りはみられない。

次に、各遺跡出土の擦切石斧を類型化し、形態の比較を試みる（図69）。1類としたのは、刃部に最大幅のある、いわゆる撥形を呈するものである。2類としたのは両側刃がほぼ平行なもので、3類はそのほかの形状のものとした。それらをさらに、横断面形によってa、b類に細分した。a類は横断面形が方形を呈するもので、b類は円形に近くなるものである。

全体的に1類が最も多く、その中でも1a類が主体的である。これを県別にみると、宮城、山形、福島は特に1a類の割合が高い

地域である。また、青森、岩手、秋田は1類を主体としながらも2a類が一定量含まれる傾向があり、東北の北部と南部で若干様相が異なる。青葉山遺跡E地点第3次調査出土の擦切石斧は基部を破損しているため全体の形状は不明だが、両側刃が平行で断面が円形に近い2b類に分類できる。東北南部では1点のみの少ない類型である。

次に大きさについて検討する。幅厚分布をみると（図70）、

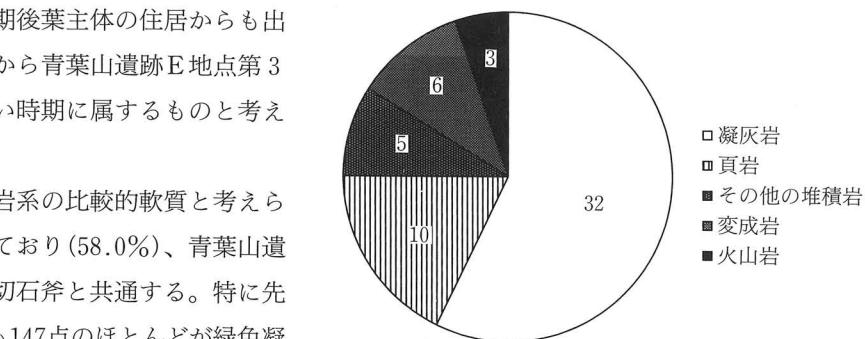


図68 擦切石斧の石材組成

Fig.68 Raw material assemblage of polished stone axes made by abrasion cutting

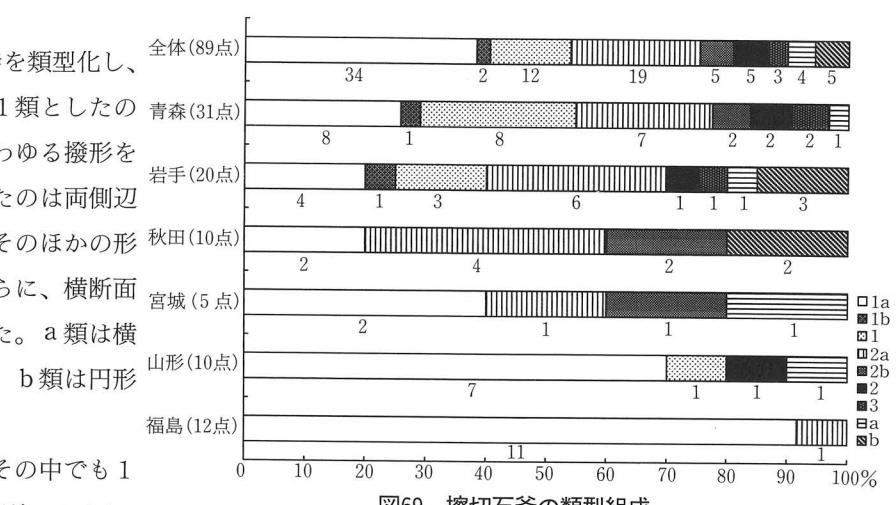


図69 擦切石斧の類型組成

Fig.69 Histograms of shapes of polished stone axes made by abrasion cutting

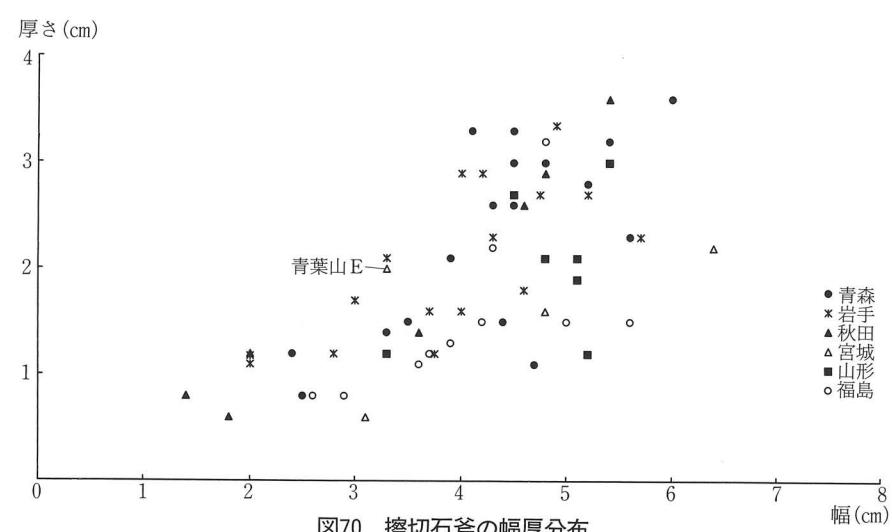


Fig.70 Scatter diagram of width and thickness of polished stone axes made by abrasion cutting

宮城、福島は幅に対して厚さの薄い、扁平なものが多いといえる。逆に青森は幅に対して厚めのものが多く、扁平なものは少ない。青葉山遺跡E地点第3次調査出土の擦切石斧は、幅に対して厚手であり、東北南部にはあまりみられないものである。長幅分布図をみると（図71）、全体的には、長さ4～16cm、幅2～6cmと大きさは様々

である。その中で、秋田、福島のものには地域性が現れている。秋田には、長さ7cm以上で幅2cm以下の細長い形状のものが特徴的にみられる。また、福島には長さ7cm以下と小型で、幅に対する長さの比が2以下の、刃部が大きく開くものが多い。

この大きさについて、特に特徴的な分布を示した秋田（図72）と福島（図73）の擦切石斧と、擦切痕のみられない磨製石斧との比較を行ってみた。すると、秋田の擦切石斧はやはり細長い傾向があり、福島の擦切石斧は小型で刃部の大きく開くものが多い。擦切痕を有しない磨製石斧に対して擦切手法を用いなかったとは言い切れないと、秋田や福島では、特定の条件を満たす磨製石斧を製作する際に、擦切手法を用いていた可能性がある。

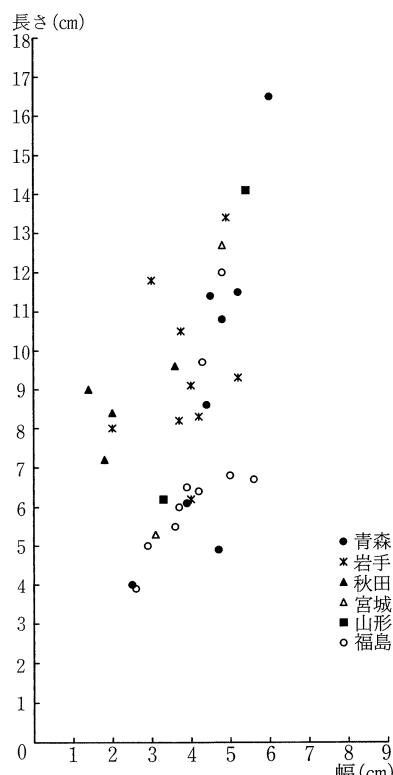


図71 擦切石斧の長幅分布

Fig.71 Scatter diagram of length and width of polished stone axes made by abrasion cutting

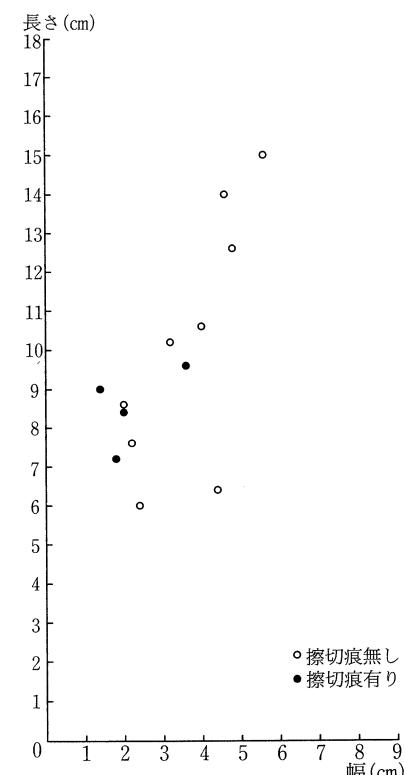


図72 磨製石斧の長幅分布(秋田県内)

Fig.72 Scatter diagram of length and width of polished stone axes from Akita Prefecture

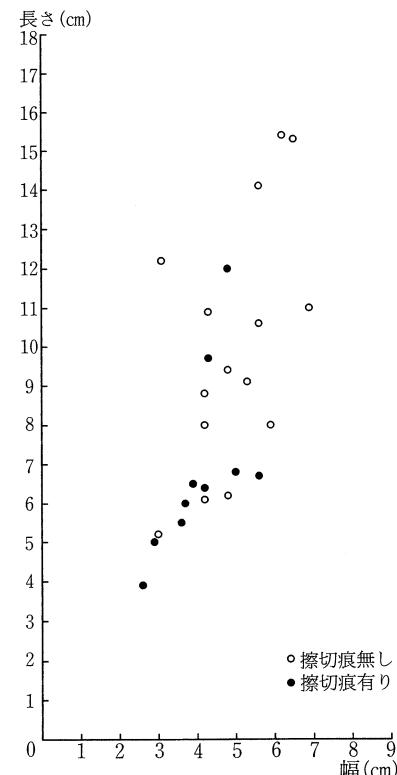


図73 磨製石斧の長幅分布(福島県内)

Fig.73 Scatter diagram of length and width of polished stone axes from Fukushima Prefecture

④ 石材選択

今回出土した石器の石材は、石英安山岩、頁岩、玉髓、鉄石英、凝灰岩、泥岩、安山岩、流紋岩など多様である。最も多く出土しているのは石英安山岩で、全体の77.4%をしめる。脆いものが多く、石器の石材には適していないといえる。

石核、剝片、チップにはこの石英安山岩が圧倒的に多いが、剝片石器、リタッチドフレークには頁岩・玉髓など石英安山岩以外の石材も多用されている（図74）。頁岩は全体的に良質である。石匙は8点中7点が頁岩製、他の1点も凝灰岩製であり、石英安山岩を選択していない。石籠は14点中9点が頁岩、3点が玉髓と、石英安山岩の割合は低い。石英安山岩を用いた石籠は短冊形の1類や楕円形の4類で、石籠の主要なタイプである撥形の2類はほとんどが頁岩を用いている。また、少數ではあるが石錐2点にも石英安山岩は選択されていない。石鏃は19点中10点が頁岩・凝灰岩・玉髓製で、石英安山岩製のものは未成品を含め約半数である。石鏃には、先に述べたように石材によって大きさが異なる傾向がみられた。また、類型によっても石材選択の違いがみられる。1類とした凹基無茎鏃には頁岩・凝灰岩のみが用いられている。

このように、定形石器には石英安山岩を選択したものが少なく、定形石器43点中11点(25.5%)のみである。また、石英安山岩を選択しても、類型や大きさによって選択状況が異なる傾向がある。それに對し、不定形石器61点における石英安山岩の割合は41点(68.8%)と高い。しかし、定形石器に24点(55.8%)も用いられている頁岩は、不定形石器においては10点(16.6%)のみである。

次に周辺遺跡の剥片石器の石材組成と比較してみる(図75)。出土点数の安定している下ノ内浦遺跡、上ノ原山遺跡、富沢遺跡15次調査の石材組成を比較すると、時期が下るのに従い、頁岩の利用率が下がっていく状況がみられる。上ノ原山遺跡や富沢遺跡ではその分凝灰岩が増加しているが、その多くが珪質凝灰岩と報告されており、それほど質の悪い石材ではないと推測される。

青葉山遺跡E地点第3次調査のように、2種の主体となる石材に、質の差がかなりあることは特徴的である。

⑤ 剥片生産と石器製作

今回の調査で出土した石核には、自然面を多く残す、原石に近い状態のものはあまり見られず、剥片にも背面が自然面に覆われたものが少ないとから、採集された原石の自然面除去は遺跡外である程度行われたと考えられる。各作業面には様々な方向からの剝離痕が観察でき、打面・作業面とも転移を繰り返していたと考えられる。また、縦長剥片あるいは横長剥片をある程度集中して剝離した痕跡を残すものや、大型剥片の周縁を剝離したものなど、様々なタイプの石核がみられる。

石核の石材には、大半を占める石英安山岩や、凝灰岩、流紋岩などがみられ、剥片石器に多くみられる頁岩の石核も1点のみ出土している。頁岩の石核は非常に小型で、徹底した剝離が行われたことを示しており、大型の石核が多い石英安山岩や流紋岩とは対照的である。

剥片の背面構成をみると、背面に腹面と同方向の剝離痕を有するものが442点中197点(44.5%)と最も多い。次いでほぼ直交する剝離痕を有するもの66点(14.9%)、同方向と直交する剝離痕を有するもの60点(13.5%)となっている。このことから、打面を転移しつつも一ヶ所の打面からある程度連續した剝離が行われていた可能性

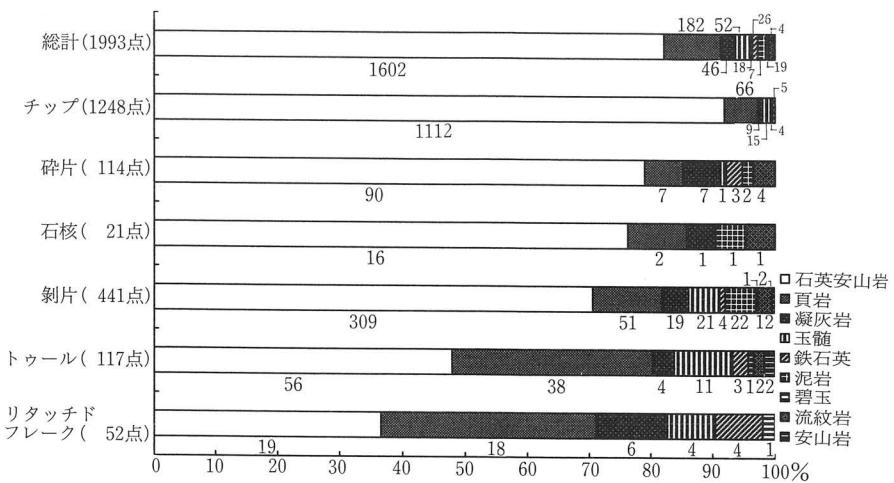


図74 青葉山遺跡E地点第3次調査出土石器の石材組成
Fig.74 Raw material assemblage of stone tools from AOE3

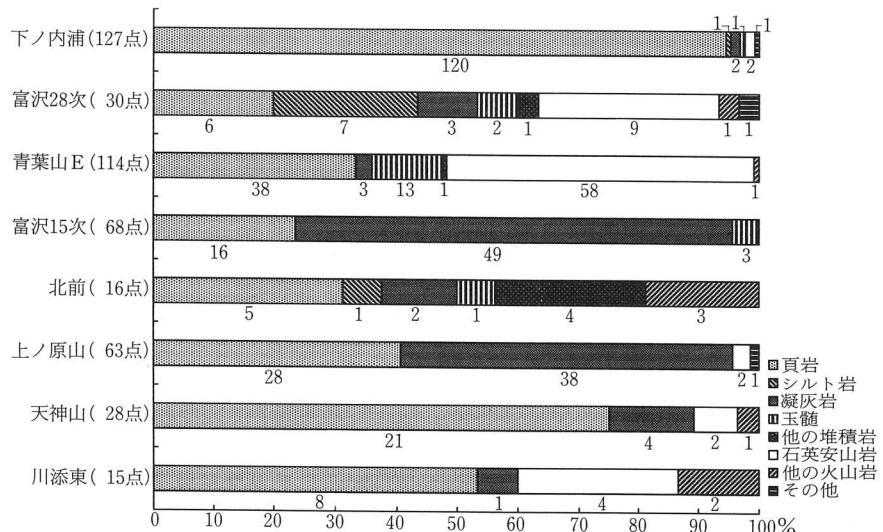


図75 周辺遺跡出土剥片石器の石材組成
Fig.75 Raw material assemblage of flake tools from sites around AOE3

が高いといえる。また、背面に腹面の剥離方向に対して直交する剥離痕を有するものが多いことから、打面転移は約90度の方向に行われることが多かったと考えられる。

このようにして生産された石英安山岩の剥片には様々な大きさのものがみられ、小型石器から大型石器まで種々の剥片石器の素材として準備されたと考えられる。先述したように、石英安山岩については剥片石器、石核、剥片、チップが多量に出土しており、遺跡内で剥片生産から石器製作までが行われた痕跡を残している。しかし、貞岩については、剥片石器は多くみられるが、石核、剥片、チップは少ないため、貞岩の剥片生産および石器製作が遺跡内で主に行われていた可能性は低いといえる。その他の石材についても貞岩と同様の傾向があるため、石英安山岩以外の石材の石器は、素材の剥片、または完成した剥片石器の状態で持ち込まれたと考えられる。特に貞岩の剥片石器は大きさ・厚さとも剥片を上回るものが多く、大型の貞岩製剥片石器（石匙・石籠など）またはその素材は遺跡外から持ち込まれた可能性が高い。

⑥ 石器出土状況

第1号竪穴住居跡は、石器の出土数が少ない。しかし石核は多くみられ、全体の約3割を出土している（図76）。逆に第2号竪穴住居跡からは多くの石器を出土しているが、石核は1点のみである。このことは、石核がまとめて廃棄されたか、石核を廃棄する場所がある程度決められていた可能性がある。

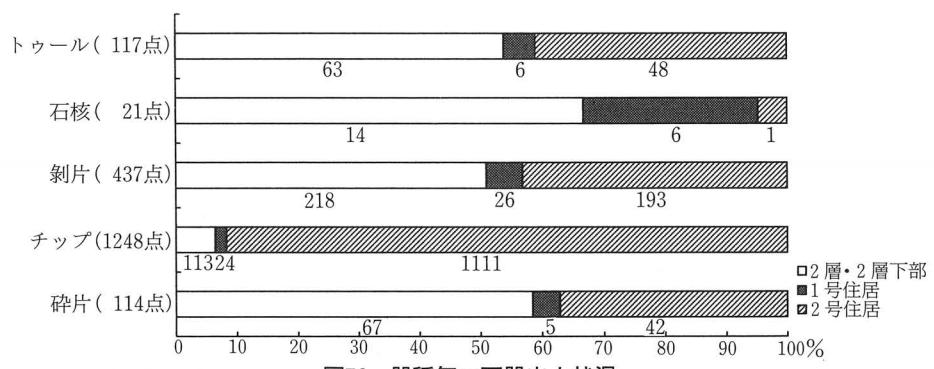


Fig.76 Frequency of stone tool types by layers and pit dwellings

また第2号住居跡からは、特にチップが多く、全体の約9割を出土している。その約半数が床面および床面壁際のピット12から検出されている。床面からは130点のチップが検出された。ピット12の埋土からは、442点(30.09g)のチップが出土した。石材は石英安山岩が428点(29.60g)で96.8%と大半をしめる。そのほか、貞岩4点(0.21g)、玉髓2点(0.02g)、凝灰岩と考えられるもの4点(0.15g)、流紋岩と考えられるもの4点(0.11g)などがみられた。このピットは、住居内での石器製作により生じたチップを、廃棄する施設と考えられる。これらのことから、この住居内で石器製作が行われていたといえる。また、床面出土の石核は1点のみであるため、別の場所で生産された剥片を持ち込んで、石器製作を行っていた可能性が高い。その剥片の多くは小型であり、トゥールの素材としての大きさを満たさなかったため、その場に残されたと考えられる。

石器製作の痕跡を残す住居跡は比較的多くみられるが、その多くは剥片貯蔵穴や剥片貯蔵場と考えられる施設を伴うもので、チップを廃棄する施設をもつ住居跡はあまり報告をみない。岩手県呉屋敷I b遺跡（佐々木嘉直1983）では、チップと剥片が西壁寄りにまとまって出土した住居が検出されている。チップを廃棄したピットはみられなかつたが、住居の壁寄りにチップが廃棄されている状況は共通しているといえる。

⑦ 小結

今回出土した石器群の分析により、縄文時代早期石器群の様相をいくつか指摘することができた。

石器組成については、縄文時代早期における地域性がみられた。礫石器の少ない富沢遺跡周辺の地域は、宮城县内の他の地域や、広く福島県、関東地方の同時期の石器群と比較しても特異なものである。この地域も縄文時代前期前葉になると、礫石器の出土数は安定する傾向があるため、縄文時代早期に、特徴的に、植物加工または礫石器の廃棄の頻度が低かった地域であったと考えられる。その地域の中でも青葉山遺跡E地点第3次調査は特

に礫石器が少ないが、剝片石器は器種、量ともに最も豊富に出土した。

その剝片石器には、頁岩や石英安山岩が多用されている。頁岩は良質のものが多く、石鏃、石匙、石箆などの定形石器を中心に用いられている。これらの器種は、何度も刃部再生を受け、長く使い込まれる器種であると考えられ、その器種に多く選択された頁岩は、重要な位置をしめる石材であったといえる。しかし、頁岩の石核、剝片、チップは少なく、頁岩製石器の未成品もみられないため、頁岩製石器の製作が遺跡内で本格的に行われていたとは考えられない。よって、この遺跡の頁岩は、付近で採取できるものではなく、他の地域から持ち込んだものといえる。その頁岩の貴重さは、徹底的に剝離が行われた小型石核や、剝片利用率の高さに示されている。

石英安山岩は不定形石器 1 類、2 類に多い。これらは出土量が多いため、長く保持されることのない、製作と廃棄の頻度が高い器種であると考えられる。それら石英安山岩製石器の製作は、石核、剝片、チップや未成品が多く出土していることから、剝片生産から石器製作まで一貫して遺跡内で行われていたといえる。その石英安山岩は遺跡付近で採取できたと推測されるが、質の悪いものが多く、トゥールの素材として利用できるものは限られていた。大型の石核が多く廃棄されていることや剝片利用率の低さがそのことを示している。しかし、チップが多くみられるため、石英安山岩製石器が盛んに製作されていたと考えられる。その良質でない石材を多く利用しなければならなかったこの遺跡の石材環境は、良好ではなかったといえる。

このように、今回出土した石器群において頁岩と石英安山岩は対照的な用いられ方をしている。このことは、頁岩を中心とする石匙や石箆と、石英安山岩を多く用いる不定形石器 1 類、2 類の用途、機能の違いが反映されている可能性がある。比較した他の遺跡においては、中心となる 2 種の石材にこれほどの質の差があるものはないと推測されるため、この定形石器と不定形石器の位置づけの違いが、青葉山遺跡 E 地点第 3 次調査出土石器群特有のものであるのか、周辺の遺跡にも共通のものであるのかは不明である。

また、住居跡からの石器の出土状況から、次の 2 点のことが指摘できた。第 1 に、石核と、剝片・チップが偏った出土状況を示すことから、石核、剝片、チップの廃棄場がある程度決められていたと考えられる。第 1 号竪穴住居跡からは、全体の石器数は少ないが、石核がまとまって出土している。それに対し、第 2 号竪穴住居跡からは多量の石器が出土し、特に剝片、チップが多いが、石核は 1 点のみである。第 2 に、チップの出土状況から、第 2 号竪穴住居跡で石器製作が行われていた可能性が指摘できた。このことは、チップ廃棄のために設けられたピット 12 や、床面から 130 点のチップが検出されたことから考えられる。また、床面出土の石核や剝片は少ないと、他の場所で生産された剝片を住居内に持ち込んでトゥールを製作したと推測される。